

2023. 2. 5. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書15章11～32節
『自分を見つけるために』

自分を見つけるために、わたしたちはどれだけ長い旅を続けてきたことでしょうか。途中で、自分を見失いこそしても、自分というものを再発見出来た人はきっと少ないのだろうさえて考えてしまいます。はたして自分を見つけるためには一体何処を目指せばよいというのでしょうか。

本日の聖書の箇所は「放蕩息子のたとえ」と題されている、たいへん分かり易い物語が展開されています。

従来解釈で読み進めれば、この記事には3つの主題が見出されます。その中の1つに軸を置いて、他の2つが縦続するという構造になっています。この1つ目の軸は神の惜しめない愛です。

そして2つ目はそのような愛に対する放蕩息子の改心であり、3つ目は兄を例にとった惜しめない愛の欠如というわけです。悔い改めることを通して神の惜しめない愛にわたしたちは生かされていることに気付くことが求められているということです。

ルカはこのような自己修養的で建徳的な記事を描きたかったのかと考えさせられてしまいます。前述した解釈とは、キリスト教がローマ帝国に公認され(313年)、その後に国教(392年)となってしまう後に誕生する解釈、つまり神と皇帝を等しく崇めるような、初代教会の告白とはまったく逆の神理解でしかないのです。簡潔に言えば、神以外のどんな権力にもおもねることをよしとしない無政府主義的な共産社会を保持してきたのが初代教会の信仰です。ですから、先の解釈とルカの神学とは相容れない、単に個人の修養に特化した道徳でしかないのです。

それでは、ルカは何を語ったというのでしょうか。それはあなたは何処で誰と出会ったのかという問いなのです。このたとえ話に登場する放蕩息子とはもちろんわたしたち自身の姿です。彼を旅立たせるモチーフは財産の生前分与です。金を使い果たした後に残されたものは、蔑まれる労働とブタのエサさ

え貪る貧困という異国の社会なのです。ここで彼は誰あろう自分自身と出会い直して行くのです。そして、自分とは何に感謝を以て依存して生きているのかを再発見してゆくのです。

実は、このたとえは初代教会の教育プログラムでした。9;1 以下、10;1 以下に記される「使徒の派遣」の内実なのです。そこでは多くの者が文字通り「派遣」されたのです。行く先は異教世界でした。それは「告発する兄」に象徴されるユダヤ教のように、定点に集約することに価値を置く生き方とは全く逆の、拡散の途上に起こる自己と他者との「出会い直し」の中にこそ価値を見出す生き方だったのです。

そこで初代教会はブタのエサに代表される格差と矛盾や差別と貧困の場こそがイエスの福音の現場であることを見つけたのです。キリスト・イエスと出会わなければ、決して相対することのなかったであろう自分の罪と出会ったのです。

わたしたちはともすれば「兄」のように権力をかさに不平と不満をたぎらせて他者を告発する場に安住してしまっているのではないのでしょうか。そんな所では自分を見出すことなど出来はしません。そうではなく、そんな自分が叩き壊される場へとわたしたちはいざなわれているのです。そこにだけ贖いの主が先立ち行かれる姿を垣間見ることが赦されているのでしよう。